

江戸川乱歩著 『貼雑年譜』<sup>はりまぜねんぷ</sup> (東京創元社 完全復刻版)

【今出川 閉架 910.268 E9549】

江戸川乱歩。この名をきいて、『少年探偵団』『怪人二十面相』など、年少の頃に少年探偵シリーズを読み耽り、明智探偵や小林少年の活躍に胸躍らせた記憶が甦る方も多いのではないのでしょうか。

江戸川乱歩(1894-1965)は、大学卒業後、造船所事務員や屋台のそば屋など各種の職業を転々とした後、1923(大正12)年雑誌『新青年』に投稿した短編「二銭銅貨」で世に認められました。それ以降、独創的なトリックと斬新な物語設定の作品を次々に発表し、読者の喝采を博しました。現在では日本の近代的推理小説・探偵小説を確立した巨星と評価され、代表的な作品はテレビドラマでもお馴染みです。

全集も数種類が刊行され、作品や関連資料を目にすることは容易ですが、未だ知られざる幻の資料が存在していました。それがここに紹介する『貼雑年譜』(完全復刻版)です。



第二次世界大戦のさなか、乱歩は創作活動の休止を余儀なくされました。この期間中に、常日頃溜めていた自分に関する新聞記事の切り抜きや書簡類をスクラップ帳に貼り付け、自筆のメモや解説・図版を添えて、自らの足跡を記録していました。このスクラップ帳こそが、『貼雑年譜』と呼ばれ、従来門外不出とされていたものなのです。

もともと乱歩は、偏執狂的な記録癖・整理癖の持ち主でした。戦争が影を落としていた時代、記録マニアの彼は、自己の来し方を振り返る孤独な営みに、おそらく嬉々として熱中していたに違いありません。その中身は、まさに「スクラップ帳による江戸川乱歩自伝」と呼べる詳細な自分史となっています。

スクラップは全9巻からなり、その期間は1894(明治27)年から1965(昭和40)年に及んでいます。今回復刻されたのは、このうちの戦前分2巻であり、少年時代の家の間取り、中学時代の授業ノート、探偵小説家となるまでの放浪と遍歴の記録、自作への書評や出版広告、知人からの書簡類、海外推理小説界の紹介記事などが収められています。その結果、乱歩の推理作家としての来歴や創作過程の研究、ひいては日本の推理小説・探偵小説形成史の面でも、重要な位置を占める歴史的資料となっています。

さて、これほど重要な『貼雑年譜』が何故今まで復刻されなかったのでしょうか。その理由は、数多くの新聞や書簡が重ね貼りしてあること、また貼付記事の裏側までメモが記入されていることから、オリジナルを再現するには、印刷や造本面で技術的な対応が困難であったからです。

過去講談社によって復刻が試みられましたが、

それは2巻から半量を1冊にまとめ、復元の難しい貼り込み頁を割愛したものでした。

今回の東京創元社版は、約8年の準備期間のもと、オリジナル版を忠実に再現する努力が払われました。版元の説明では、貼付記事の裏側を撮影するためいったん綴じを解体し、乱歩が使った糊の成分分析まで行って、記事各片を剥がしたということです。

既に限定200部は完売のため、限られた公的機関でしか閲覧できませんが、同志社大学でも1部を購入することができました。興味を持たれた方には、是非いちど手にとって、じっくりご覧いただきたい資料です。